

日本語会話ボランティアの制度化が持つ意義と課題

永井涼子

要旨

本稿では、昨年度留学生センターの一部の日本語授業で実施されたビジターセッションを、今年度より「日本語会話ボランティア」として全クラス対象の登録制にし、より多くの日本人学生に国際交流の場を提供すると同時に、より多くの日本語授業において日本人学生を会話の練習相手として呼べるようにした取組みを報告する。またアンケート結果から、制度化の意義（国際理解の意識基盤作り）と募集方法についての課題、改善策について述べる。

キーワード

会話ボランティア, ビジターセッション, 日本語, 国際化

1 はじめに

「教師以外の日本語母語話者や準母語話者が「ビジター」として、学習活動の一環として日本語のクラスに参加し、学習者とインターアクションを持つ場」（中井,2003:81）である「ビジターセッション」は、コミュニケーション能力を伸ばす一つの教育活動として、国内外を問わず様々な機関の日本語教育において取り入れられている（中井,2003;原田,2004;パンダ,2005;宮崎他,2006;渡部他,2008）。

ビジターセッションが日本語学習にもたらす意義については、言語運用能力の向上、ストラテジーの学習、自己モニタリング力の向上、学習の動機づけと自信付与など、様々な点が指摘されている（園田他 2008; 中井, 2003; 原田,2004; 村岡,2001）。つまり、留学生への日本語教育の側面から考えると、ビジターセッションは意義ある活動の一つであると言える。

しかし、ビジターセッションは、ビジターとして参加している日本人に対してどのような意義を有しているのであろうか。ビジターの日本人に対するアンケート結果から、多角

的な考え方に触れられた、コミュニケーションに臨む積極的な姿勢が大切である、などビジターの日本人が、活動に対して高い評価をしたり、学びあるいは気づきの場としての重要性に気付いたりしているという指摘はある（原田,2004; 渡部他,2008）。しかし、ビジターセッションはあくまでも留学生対象の日本語教育の授業の一環であることから、ビジターセッションが日本人ビジターにもたらす意義についての考察は十分とはいえない。

確かにビジターセッションは、日本語授業にビジターとして参加してもらうため、留学生に対する意義が重要視されるべきである。しかし、日本人ビジターへの意義にも目を向けることで、双方にとって学びの場となる可能性は十分にある。つまり、日本人ビジターはビジターセッションを通じて、国際交流を一過性のイベントとして経験するだけでなく、異文化コミュニケーションを学ぶことができると考えられる。大学の国際化が求められる今日、ビジターセッションも国際化を促す一つのツールとなるのではないだろうか。

山口大学では、昨年度留学生センターの一部の日本語授業のみで試験的に行ったビジタ

一セッションを、今年度は開かれた制度としてより多くの日本人学生に国際交流の場を提供するため、「日本語会話ボランティア制度」を立ち上げた。本稿では「日本語会話ボランティア制度」の取組みを紹介し、その制度化における意義や課題、改善策について分析および考察を行うと同時に、「日本語会話ボランティア制度」をより効果的に運営するための「国際交流ネットワーク」づくりを提案する。

2 山口大学のこれまでのビジターセッション

山口大学では 2011 年度、留学生の日本語学習支援および日本人学生の国際理解促進のため、留学生センターの一部の日本語授業において、山口大学に在籍する日本人学生を対象に会話ボランティア（ビジター）を募集し、ビジターセッションを行った（永井，2012）。この取組ではビジターセッションを行うクラスを限定し、そのクラスに来られる日本人学生にビジターを依頼し、学期中の全ての授業に参加してもらった。

ビジターセッションに対する評価をアンケートで調査したところ、留学生からは日本語運用能力向上につながるという意見が多く、日本人学生からは留学生や国際交流に対する意識が変化したという答えがあり、日本語授業におけるビジターセッションが日本人学生の国際理解教育としての意義もあることが明らかになった（永井,2012）。

この取組みは、同じビジターが学期中を通して全ての授業に参加することで、①留学生と日本人学生の間に深い交流が生まれる、②日本人学生が留学生の日本語レベルを把握した状態で授業が進められるというメリットがあった。しかし、一方で、①クラスが限定されるためビジターセッションを体験できる留学生、日本人学生に限られる、②学期中を通してビジターが参加できるようなクラスは限られており、単発で頼むことが難しい、③日

本人学生が参加できるような授業を毎回組み立てる教員側の負担がある、などのデメリットもあった。つまり、深い狭い活動であったといえる。

そこで山口大学留学生センターでは、より多くの日本人学生と留学生が交流し相互に学びあえる環境を作るため、吉田キャンパスの全ての日本語授業に対して、日本人学生をビジターとして派遣できる制度として、「日本語会話ボランティア制度」を立ち上げた。次章で制度の概要について詳述する。

3 「日本語会話ボランティア制度」の概要

本章では今年度から立ち上げた「日本語会話ボランティア制度」の概要を述べる。

本制度は、国際交流に興味のある日本人学生に「日本語会話ボランティア」として登録してもらい、その登録者に対して教員が必要に応じて参加呼びかけメールを送り、参加を募るというものである。昨年の取組みと比較して、制度化に伴う大きな変化は、①希望すれば全ての日本語授業で会話ボランティアを呼べること、②学期を通して参加する必要はなく1回だけの実施や参加も可能であることである。

名称については、「ビジター」「会話パートナー」など様々な名称が考えられるが、①会話練習の補助を主にお願ひする、②ボランティアであり義務ではない（気軽に参加してほしい）、③日本語で行う（英語が苦手でも来てほしい）、という意味を込めて「日本語会話ボランティア」という名称とした。

なお、本学は、吉田キャンパス（人文学部・教育学部・経済学部・理学部・農学部・共同獣医学部）、常盤キャンパス（工学部）、小串キャンパス（医学部）とキャンパスが分かれており、留学生センターは吉田キャンパスと常盤キャンパスに設置されている。今年度は本制度を吉田キャンパスのみで実施した。常盤キャンパスについては次年度

の課題としたい。

3.1 目的

グローバル時代の今日、大学の国際化、国際的人材の育成は大学の急務といっても過言ではない。しかし、日本人学生の「内向き」傾向が指摘されており、日本人学生の留学件数が減少傾向にある（船津,2012）。山口大学留学生センターにおいても、留学説明会に工夫をして海外留学を促進したり、タンデム学習を開始したりするなど、大学の国際化、国際的人材育成を目的とした様々な取組みが行われている。「日本語会話ボランティア制度」もその一環である。

「留学生」という学内の国際的人材を活用し日本人の国際理解教育に役立てると同時に、日本人の持つ「日本語母語話者」という側面を留学生の日本語教育に役立てるという狙いである。「日本語教育」の側面から、日本人の国際理解教育への寄与を目指す。

本制度の具体的な目的は以下の4点である。

- 目的1： 日本人学生と留学生の交流の場を広く提供する
- 目的2： 留学生に対して日本人学生が持つ「心理的壁」を取り除く
- 目的3： 国内で異文化コミュニケーションを体験する
- 目的4： より多くの日本語授業で運用能力向上を目指す活動を行う機会を提供する

日本人学生に対しては、目的1から目的3までが該当する。留学生に対しては、目的1, 目的3, 目的4がそれに当たる。

3.1.1 日本人学生に向けての目的

近年日本人学生の留学件数が減少傾向にあることが問題視されているが、彼らは国際交

流に興味を失ったわけではなく、興味がありつつも「何を話していいかわからない」「話しかけにくい」と留学生との交流に対する心理的壁を感じている（梶原,2003）、関心はあるものの、その関心を行動に変えていくモチベーションがない（田中,2010）といった指摘がある。つまり、何らかの「後押し」が必要な状況にある。

そこで「日本語会話ボランティア制度」では、日本語で都合に合わせて国際交流できるという気軽さから、国際交流に対する敷居を低くすることができる。また日本語教員の指導のもと日本語授業の補助と言う形でコミュニケーションを行うことで、「外国人と交流できる」という自信を与えられると考えられる。

さらに、これまできっかけがなくて交流できなかった学生にも機会を提供でき、全クラスが対象となるため、数多く提供できる。また留学生が留学のモデルケースとなり、留学がイメージしやすくなる効果も期待できる。

つまり、「興味はあるけど…」と躊躇している日本人学生に、海外を身近に感じ、留学への意欲を促進すると同時に、グローバル社会では必ず経験するであろう「外国人と話す」という異文化コミュニケーションを体験することで、国際理解教育につなげる。

3.1.2 留学生に向けての目的

本学で日本語授業を受講する留学生はその多くが特別聴講学生（交換留学生）である。彼らは研究室で研究活動を行うわけではなく、また滞在期間も半年から1年間と短いため、日本人学生との交流の機会はそれほど多くない。

しかし、「日本で日本語を学ぶ」意義として母語話者である日本人との会話練習や運用能力向上は、留学生が当然求めるべきところである。そこで、多くのクラスで本制度を活用してもらい、様々な形で多くの日本人学生

と知り合える機会を増やし、様々な日本語に触れる機会を提供することで、より魅力ある日本語授業提供へとつながる。

3.2 募集方法

日本人学生の募集は掲示板を利用して行った。掲示用のポスター（資料1）を作成し、各学部に掲示を依頼した。ポスターには、①日本語の授業で会話練習の相手となるボランティアを募集していること、②留学生と日本語で話すこと、③連絡先を登録してもらい必要に応じてメールにて連絡すること、④学年、申込時期が不問であること、を記載した。

掲示を見た学生の中には、具体的な話を聞きたいと言って研究室を訪ねてくる学生、メールにて問合せをしてくる学生もあり、その場合は昨年度使用した教材などを紹介しながら詳細な説明を行った。

また、年度途中からは既に登録している学生に対して、友だちを連れてきてもいいので、興味がありそうな人には声をかけてもらうように依頼した。

さらに、留学生に1対1でサポートを行うチューターに応募した学生に対しての面接や説明会などでもチラシを配布し、募集を行った。

1.3 運営方法

日本語会話ボランティア制度の運営の流れは以下の通りである。

① 掲示や口コミによって「日本語会話ボランティア」に興味を持った学生が窓口の教員に連絡をしてくる

↓

② 窓口の教員が制度の詳細内容、個人情報の取り扱いについて説明し、登録用フォーマット（氏名、所属、学年、パソコンのアドレス、携帯電話のアドレス）を送る

↓

③ 送られてきた連絡先は、窓口の教員が名簿にまとめ管理する

↓

④ 日本語教員は必要に応じて、窓口の教員に必要な人数やクラス内容、必要な準備などを伝える。

↓

⑤ 窓口の教員が④の情報を登録者全員にメール（Bcc.）で伝える。

↓

⑥ 日本語会話ボランティア登録者は、来られる場合は返信し、来られない場合は連絡しない。

↓

⑦ 窓口の教員は授業前日に参加する日本語会話ボランティアの学生の名前や所属、ボランティア経験といった情報を、担当教員に伝える。

↓

⑧ 登録者の参加状況を把握するため、窓口の教員は名簿に参加状況を書き込み、管理する。

基本的に会話ボランティアの参加呼びかけのメールは、該当授業の1週間前を目安とした。学生が忘れてしまうこと、他の予定が入ってしまうことを防ぐためである。

また前節でも言及したが、会話ボランティア登録者の友達も授業に参加可能とした。

「お試し」のような形で授業に参加してもらい、興味を持ったら登録してもらうようお願いした。友達を連れてくる場合は、出席確認のため、友達の氏名だけは連絡してもらえるように依頼した。

さらに、サマープログラムなど短期プログラム中はサマープログラムのチューターに対しても参加呼びかけのメールを送り、希望者には日本語会話ボランティアとして登録した。

3.4 参加状況

平成 25 年 1 月 11 日現在の日本語会話ボランティア登録者の状況は以下の通りである。

日本語会話ボランティア登録者： 45 名
 友達紹介で参加した未登録者： 14 名

ボランティアの登録者はある特定の時期に一度に増えるのではなく、毎月少しずつ登録者が増えている状況である。未登録者の中には複数回参加している学生もいるため、こちらから登録を呼びかけるなどしたい。

登録者の所属別の内訳は以下の表 1 の通りである。

表 1 登録者の所属内訳

所属	人数（未登録者）
教育学部・教育学研究科	19名（4名）
人文学部	9名（3名）
経済学部	10名（2名）
理学部・理工学研究科	4名（3名）
農学部	3名
不明 ¹⁾	（2名）

本年度から始まった連合獣医学部以外の全ての学部から登録者が集まっていることがわかる。人数の分布については、各学部の掲示方法などにもよるかもしれないが、「授業で学習を補助する」という活動内容上、教育学部の学生が最も多く興味を持ったものと考えられる。

また、学年別の内訳は以下の表 2 の通りである。最も多いのは 1 年生で 18 名であり、全体の 40 % を占める。要因として 1 年生は掲示板を注視する機会が多いことや、入学したばかりで挑戦する意欲が高いと考えられる

こと、サークルやアルバイトなど他のコミュニティに参加する前に応募したことなどが考えられる。

1 年生に登録者が多いことは、非常に意義が大きい。まず、日本語会話ボランティアはその意識の基礎を築くものであるため、将来的に留学を考えるのであれば学年が早いとその効果も期待できる。また、1 年生から継続して参加することで国際理解を幅広く、深く行うことができる。

表 2 登録者の学年内訳

学年	人数（未登録者）
1 年生	18名（4名）
2 年生	9名（1名）
3 年生	11名（3名）
4 年生	6名（2名）
修士 1 年生	1名（2名）
不明 ¹⁾	（3名）

本年度は 31 回の授業において参加を呼び掛けたが、登録者のボランティアの授業への参加状況は以下の表 3 の通りである。

表 3 登録者のボランティア参加状況

参加回数	人数（未登録者）
0 回	15名
1 回	9名（12名）
2 回	8名（1名）
3 回	2名
4 回	1名（1名）
5 回	1名
6 回	2名
7 回	2名
8 回	2名
9 回	1名
10 回	1名
21 回	1名

0回の人数のうち、3名は登録したばかりのため、日程的に参加できなかったと考えられる。また1名は現在留学中のため、参加できていない。

表3を見ると、登録者のうち、外的要因により参加できない4名を除いた12名（27%）が登録したものの、参加できていない状況であることがわかる。

この要因については次章のアンケート調査で考察を行うが、参加を呼び掛ける授業がほぼ決まっていたため、日程が合わない人は常に合わないと言う状況が考えられる。8回以上参加している学生は3年次以上の学生であり、時間割の自由度も関係しているであろう。

次章では登録者に対して行ったアンケート調査をもとに、本制度の意義および問題点を探る。

4 日本語会話ボランティア制度の意義と課題

本章では、2013年1月に実施したアンケート結果から、本制度の意義と課題について分析および考察を行う。

4.1 アンケート概要

日本語会話ボランティア制度に関するアンケートを、日本語会話ボランティア登録者に対して実施した。授業に参加していない登録者に対してもアンケートを実施するため、メールにて実施した。

登録者45名に対し、メールにてアンケートを送った結果、19名（42%）から回答を得た。メールでの依頼となったため回収率が高くないが、登録者の意見の傾向は検討できると考えられる。

アンケートの質問項目は以下の通りである。

A) 日本語会話ボランティア制度はどのように知りましたか。 []

1. 掲示板 2. 友達に聞いて 3. その他 ()

B) 日本語会話ボランティアに参加しようと思った理由は何ですか（複数回答可）。 []

1. 国際交流に興味があったから
2. 日本語教育に興味があったから
3. 留学生の友達を作りたかったから
4. 留学したいと思っているから
5. その他 ()

C) 日本語会話ボランティアに実際に参加しましたか。 []

1. はい（→Eへ）
2. いいえ（→Dへ）

D) 参加しなかった理由は何ですか（複数回答可）。 []

1. 授業の時間が予定と合わなかった
2. 忙しかった
3. 自分が参加しなくてもいいと思った
4. メールに返信するのが面倒だった
5. メールの募集連絡が遅かった
6. 面倒だった
7. その他 ()

E) 参加してみてどうでしたか。 []

1. とてもよかった
2. よかった
3. あまりよくなかった
4. よくなかった

F) E)で、1. とてもよかった 2. よかったと答えた理由は何ですか。自由にお書きください。

G) E)で、3. あまりよくなかった 4. よくなかったと答えた理由は何ですか。自由にお書きください。

H) これまで留学した経験はありますか。 []

- 1.ある 2.ない

I) H)で、2.ないと答えた人は、このボランティアを通して留学に興味がありましたか。

[]

- 1.はい 2.いいえ

J) I)の答えの理由をよかったら書いてください。

K) これまで留学生センターの行事のボランティアやチューターに参加したことはありますか。[]

- 1.はい 2.いいえ

L) ボランティア制度の募集方法（掲示板）についてどう思いますか。[]

- 1.とてもよい 2.よい 3.問題ない
4.少し問題がある 5.問題がある

M) ボランティア制度の募集方法で何かアイデアがあったら書いてください。

N) メールでの授業への参加の呼びかけについてどう思いますか。[]

- 1.とてもよい 2.よい 3.問題ない
4.少し問題がある 5.問題がある

O) 授業への参加の呼びかけについて何かアイデアがあったら書いてください。

P) 最後に何かご意見などありましたら、ぜひお願いします。

次節以降でアンケートの回答を分析および考察する。

4.2 参加理由と満足度

日本語会話ボランティア制度に参加した理由は以下の表4のようになった。その他の回

答としては「短期留学した時、現地の会話ボランティアの人にお世話になり、自分も誰かの役に立ちたいと思ったから」「友達に誘われたから」が挙げられる。

表4 B)参加理由（複数回答可）

1.国際交流に興味があったから	15
2.日本語教育に興味があったから	3
3.留学生の友達を作りたいから	12
4.留学したいと思っているから	2
5.その他	2

表4からもわかるように、参加理由には留学生との交流に興味を持っているからであることがわかる。特に、「3.留学生の友達を作りたいから」（12名）「4.留学したいと思っているから」（2名）よりも「1.国際交流に興味があったから」（15名）のほうが若干多かったことから、留学したい、友達を作りたいという積極的な理由よりは、興味があるから参加してみたというやや消極的な理由のほうが多いことがわかる。つまり、国際的人材になるための「後押し」をするという本制度のターゲット通りの学生が参加していると言える。

また、そのような希望を持って参加した学生が実際に参加した場合の満足度は以下の表5の通りである。

表5 E)参加後の満足度

1.とてもよかった	9
2.よかった	8
3.あまりよくなかった	0
4.よくなかった	0
5.未記入（不参加のため）	2

表5からもわかるように参加した学生は全員が「1.とてもよかった」あるいは「2.よかった」と回答し、この制度に対して満足して

いることがわかる。国際交流をする、留学生の友達を作るという希望がほぼ叶えられたからではないだろうか。

F)で高評価の理由を自由記述にて尋ねたところ、以下の表6のような結果となった。

表6 F) 1.とてもよかった 2.よかったと答えた理由

国際交流の機会が持てた	8
いろいろなことを学べた	4
クラスの雰囲気よかった	4
教える難しさを知った	2
留学生の勉強の姿勢に刺激を受けた	2
留学生が気さくだった	2
留学生の友達できた	2
外国人のイメージが変わった	1
わかりやすく伝える能力を養えた	1
他学部・他学年の日本人同士の交流が生まれた	1

国際交流をする、留学生の友達を作る、など以外にも、留学生の学習姿勢に刺激を受けたり、日本語や日本や外国について学べる機会となったりしたという回答も多く寄せられた。

つまり、会話ボランティアを通して、参加当初の目的以上のものが得られたことにより、表5のような評価が得られたと考えられる。

以上のことから、日本人に対する本制度の目的である以下の3項目について達成できたのではないかと考えられる。

- 目的1： 日本人学生と留学生の交流の場を広く提供する
- 目的2： 留学生に対して日本人学生が持つ「心理的壁」を取り除く
- 目的3： 国内で異文化コミュニケーションを体験する

4.3 国際交流経験の影響

本節では、どのような背景を持った学生が本制度に登録しているかを探るため、留学生センターで行う行事やチューター、留学経験などを調べ、これまでの国際交流の経験がどの程度影響しているのかを分析する。

まず、H) 留学経験の有無は以下の表7の通りである。

表7 H) 留学経験の有無

1.ある	4
2.ない	15

次に、K) 留学生センターの行事ボランティアやチューターへの参加経験については、以下の表8の通りとなった。

表8 K) 留学生センターの行事ボランティアやチューターへの参加経験

1.はい	7
2.いいえ	12

表7、表8から言えることとしては、留学はしていないが国際交流に興味を持ち、行事などに参加をし始めた段階の学生や、これから活動を始めようかと思っている学生が登録していることが挙げられる。これは、国際理解の基盤を作り、国際交流や海外留学への後押しをするという本制度の目的に合致した学生が参加していることがわかる。実際に、アンケートの自由記述からも「国際交流のきっかけをつくってくれる、とても良い制度だ」「留学生との間に感じていた壁をなくすことができた」という記述がみられる。

つまり、これまで国際経験を豊富にしている学生ではなく、これから国際経験を積む学生の国際交流の第一歩として本制度が機能しているのである。

4.4 日本語会話ボランティア制度の意義

4.4.1 日本人学生の学び

本制度に対するアンケートから、日本人学生が様々なことを学び、吸収していることが明らかになった。

表6からも「いろいろなことを学べた」という回答が得られている。具体的に、日本人学生はどのようなことを学べたと意識しているのかというと

- ・ 日本語を改めて学べた
- ・ 日本と外国の文化の違いを知ることができた
- ・ 日本について考える機会を得た

などが挙げられている。つまり、国際交流をすることによって、自分の母語や国についての意識を高められたと考えられる。これは永井（2012）でも同様の結果が得られているが、単発の参加も可能な登録制度を利用した中で、国際交流の基盤を作るという本制度の目的を日本人学生が達成できたと自覚できていることがわかる。

4.4.2 海外留学への意欲の促進

H) において海外留学の経験がない学生に対して、D) ボランティアを通して留学に興味を湧いたかどうか尋ねたところ、以下の表9のような結果となった。

表9 D) ボランティアを通して留学に興味を湧いたか

1. はい	7
2. いいえ	6
3. 無回答	2

表9で「いいえ」と答えた学生のうち、2名は登録したものの授業への参加はまだない学生である。その他の4名が「いいえ」と答えた理由としては、「もともと留学希望だっ

た」「留学としてではなく、旅行として行ってみたい」「留学するほど専門分野の勉強が進んでいない」であった。つまり多数の学生が日本語会話ボランティアを通じて「国際交流への興味」を「留学への興味」に発展させている傾向が指摘できる。

つまり、日本語会話ボランティアは「海外留学への入り口」ではなく「海外留学への入り口の入り口」であり、海外留学への意欲促進の素地づくりを担っていると言える。

4.4.3 日本語授業に対する意義

日本語授業に対する意義としては、永井（2012）でも指摘した通り、日本語運用能力の向上へつながることが挙げられる。今回は制度化し、単発でも会話ボランティアが頼めるようになったため、様々な授業での活用が可能となった。

また、固定メンバーではなく、その都度メンバーが変わるため、留学生も様々な日本人の日本語に触れることができる。これは特に中級以上の留学生にとっては、日本でビジターセッションを取り入れた授業を行うからこそ得られる意義であろう。さらに日常会話では聞き逃したり、聞き返せなかったりしても、日本語の授業中であれば生の日本語を聞きながら、それについて詳しく質問することも可能である。

また、担当教員の負担を考えても、無理に毎回日本人学生が参加する活動を考えなくてもよく、座学で学ぶ、留学生同士でゆっくり学ぶ、日本人学生と応用練習をする、などと分けることができる。もちろん、日本人学生に毎回出席してもらいたい場合は、毎回募集をかけることもできるため、活動の選択肢が増えたと言える。

日本語会話ボランティアを制度化することで、活動の方法が広がり、学習の効果もより期待できるようになったと考えられる。

4.5 日本語会話ボランティア制度の課題と改善策

日本語会話ボランティア制度には、前述の通り、様々な意義が考えられるが、もちろん課題も挙げられる。

まずは募集方法である。前述の通り、今年度は、掲示板への掲示（資料1）を中心に、友達や教員からの呼びかけなどを行った。しかし、アンケートでL)募集方法について聞いたところ、表10のように改善したほうがよいという回答が複数得られた。

表 10 L) 募集方法

1. とてもよい	1
2. よい	7
3. 問題ない	7
4. 少し問題がある	4
5. 問題がある	0

また、M) 具体的な募集方法の改善案については、表11のような意見が寄せられた。一貫して言えるのは現在の募集方法では不十分であるということである。

表 11 M) 募集方法の改善案

人目を引くポスターにする	5
日本語だけでいいことを明示する	1
日本人向けだということを明示する	1
全ての学部に掲示されるようにする	2
研究室に掲示してもらおう	1
SNS やホームページを使う	1
QR コードをポスターにつける	1
日本人向けの授業で呼びかける	1

以上の意見に対して、以下のような改善案が考えられる。

- ポスターは情報を簡潔にまとめ、写真を掲載するなどして、活動の様子がわかる

ようにする。

- ポスターはメールで各学部へ掲載を依頼するのではなく、大きいサイズでカラーコピーしたポスターを持参し、掲示を依頼する。
- 留学生センターの主事が各学部にいるので、研究室にポスターの掲示を依頼し、授業での宣伝を依頼する。
- 留学生センターのホームページに活動状況や活動予定などを記載する。

上述の項目は実現可能なものであるため、次年度での改善策として実施していきたい。

次は、会話ボランティアが参加できる授業に制限があるという課題である。今回のアンケートでは登録したが参加がまだである2名の学生から、不参加の理由を尋ねたところ、「予定が合わなかった」「忙しかった」「面倒だった」という答えが得られた。

「予定が合わなかった」という点については、今年度でボランティアを実際の募集したクラスが、27クラス（種類別）のうち9クラスだけであったことから言える。作文や文法などのクラスでは実施が難しく、授業の内容によるところはあるが、日本語教員への呼びかけをさらに行う必要がある。

「忙しかった」「面倒だった」という答えについては、ホームページなどで分かる範囲でのスケジュールをまとめて知らせたり、授業の様子などを写真入りで報告したりすることで、予定の調整をしやすくしたり、参加意欲を促進したりすることができると考えられる。

また、今回は吉田キャンパスだけでの実施であったため、次年度は常盤キャンパスでの実施も行う。

5 国際交流ネットワーク

本章では、日本語会話ボランティア制度を含め、国際的人材の育成への次の一歩とし

て、「国際交流ネットワーク」を提案したい。

前章までで日本語会話ボランティア制度が海外留学や国際理解の基盤を形成するための足掛かりとして機能していることが明らかになった。一方で、予定が合わず参加できない学生がおり、また「もっと参加できる授業を増やしてほしい」という要望もアンケートに見られた。しかし、会話ボランティアが参加できる授業は限られている。

そこで、留学生センターで既に行っている各行事のボランティア、タンデム学習、チューターに参加している学生と、日本語会話ボランティア制度に登録している学生を1つの「国際交流ネットワーク」としてまとめ、様々な国際交流の情報を流したり、参加している日本人同士の交流を行ったりしてはどうだろうか。

これにより、授業に参加できない学生もその他の行事などで国際交流する機会を持つことができる。また日本語ボランティアの存在を知らなかった学生にも、本制度を周知することができる。さらに、国際交流に興味を持つ日本人同士が交流する機会を増やすことで、情報交換を積極的に行ったり、お互いの留学生の友人を紹介しあったりするなど、活動や学びの幅がさらに広がると考えられる。アンケートからも日本語会話ボランティアに登録している学生のうち63%の学生は、留学生センターの他の行事などに参加したことがないと回答している。また、自由記述からは「(留学生センターが)入りにくい雰囲気である」という指摘もあり、より開かれた活動を進める上で、様々な角度から学生を募集し、その学生に他の活動を紹介する機会が必要ではないだろうか。

また国際交流ネットワークを作成することで、情報の集約化が進み、情報管理や運営上も効率的になると考えられる。今後の検討課題の一つとして挙げられる。

6 終わりに

本稿では、昨年度、一部の授業で行ったビジターセッションの取組みを、「日本語会話ボランティア制度」という登録制の制度にし、全ての日本語授業を対象とすることで、より多くの日本人学生が様々な授業に参加できるようにした取組を紹介し、その意義と課題について述べた。

制度化することにより、昨年度の参加者16名から約60名への参加と大きく登録者・参加者を増やすことができた。しかし一方で、登録したものの日程の都合で参加できない学生も多くいる。国際交流に興味を持つ日本人学生に何らかの形で場を提供する一つの手段として、日本語会話ボランティアを含む「国際交流ネットワーク」の作成が挙げられる。国際交流に興味のある人をネットワークとしてつなげ、様々な情報を流し、多様な国際交流の場を提供するというものである。

日本語会話ボランティアについては、参加者は全員満足しており、自らの学習意欲を刺激されたり、自国や母語について再認識したりするなど学びの機会となっている。今後は募集方法に改善を加え、より多くの学生が参加でき、山口大学での国際的人材の育成に少しでも寄与できる活動となるべく働きかけていく必要がある。

(留学生センター 講師)

【参考文献】

- 園田博文・奥村圭子・中村朱美, 2008, 「異文化理解力とコミュニケーション能力の養成にむけて—山梨大学・山形大学・佐賀大学の授業実践を事例として—」『山形大学紀要(教育科学)』第14巻第3号, 55-77.
- 田中梓, 2010, 「若者は本当に内向きにな

ったのか？－日本人の英国留学とブリティッシュ・カウンシルの留学推進に向けた取組について－」『留学交流』vol.22 no.7, 14-19.

中井陽子, 2003, 「談話能力の向上を目指した会話教育－ビジターセッションを取り入れた授業の実践報告－」『講座日本語教育』第39分冊, 79-100.

永井涼子, 2012, 「日本語授業におけるビジターセッションの取組と意義－日本人学生・留学生双方の視点から－」『大学教育』第9号, 53-64.

原田明子, 2004, 「海外におけるインターアクション能力を伸ばすための学習環境デザイン－早稲田 Education (Thailand) の活動報告から－」『早稲田大学日本語教育研究』4, 205-217.

パンダ, ナビン, 2005, 「ビジターセッションの効果と日本人協力者の役割－MOSAI 日本語学院におけるアンケートの分析から－」『日本言語文化研究会論集』第1号, 41-57.

船津秀樹, 2012, 「海外留学の動機作り－ブリッジ・プログラムの重要性－」『留学交流』14, 1-11.

宮崎幸江・鈴木庸子, 2006, 「中級クラスにおけるビジターセッション－実践例と課題－」『ICU日本語教育研究』2, 67-76.

村岡貴子, 2001, 「大阪大学短期留学プログラムOUSSEP上級日本語クラスにおける

ビジターセッション 2000 年春学期の実践報告」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』5, 113-116.

渡部倫子・坂野永理, 2008, 「日本語会話パートナー制度を活用した日本語授業」『大学教育研究紀要』第4号, 23-31.


【注】

- 1) 友達の紹介などで参加した学生の中には所属・学年が不明の学生もいる。

【資料1】

留学生と日本語で話してみませんか!?

**日本語授業の
会話ボランティア募集**



留学生センターでは、留学生のための日本語の授業で、会話の練習相手となってくださる人を募集しています。日本語で留学生と話すボランティアです。国際交流に興味はあるけど、英語で話す緊張する…何を話したらいいかわからない…という人は参加してみてください！準備は必要ありません。学年も不問です。

会話ボランティアは登録制です。
興味のある方は下記の連絡先に、ご連絡ください。「ボランティア協力者」として登録させていただきます。
日本語の授業で、会話ボランティアさんのお力を借りたい時に、その都度ご連絡します。都合の合う時に参加していただくという形です。
学期途中からの登録もOKです。ぜひご連絡ください。

留学生センター
担当: 永井涼子
電話: 063-833-5987
メールアドレス: nagair@yamaguchi-u.ac.jp